

「協同する力」 それを生かす組織を

センター事業団 静岡出張所 聖隷沼津病院 現場から

矢吹美樹（センター事業団）

「センター事業団の仕事は誠実・正直。そして、働いている人の『和』がある」（聖隷沼津病院河合栄養課長）。これが仕事拡大の大きな決め手になった。増えた仕事は、日中の食器洗浄と調理補助業務。年間事業高は、夜間の食器洗浄も含め、2150万円になる。他の病院の業務委託も決定し、4月からは「出張所」から「事業所」へと生まれ変わる。「どうやってその『和』がつくられているのだろう。そこに『協同労働』の真髄に触れるものがあるのではないか」。そんな思いで、聖隷沼津病院現場を訪ねた。

「協同する力」それを生かす組織を

いつ監査が入っても安心だよ

聖隷沼津病院現場では、5年前から夜間の「食器洗浄業務」を行っている。18:00から40分ほどは厨房の中の清掃。昼間使ったガスレンジや五徳、シンクなどを磨き上げ、床や食品庫の中なども清掃する。病棟から入院患者の夕食の食器が戻ってくると、食器洗浄にかかる。下洗いをした食器を洗浄機にかけ、かごに並べて食器乾燥機で乾燥させる。150～180人分、一人あたり4～5個の食器があり、汁椀以外は瀬戸物なのでとても重く、破損も

しやすい。トレーも漆塗りのため、傷をつけないように気を使いながらの作業だ。18:00～20:00と短時間の仕事だが、1年365日仕事のない日はない。ここで、7人の組合員が交代制で働いている。

聖隷沼津病院では、「食は生きる意欲につながるもの。病院食をおいしく」と様々なとりくみをされている。「真空調理」もそのひとつ。

「真空調理」とは、下処理した食材を調味料と一緒に包材にいれ、機械で真空パック状態にして保存し、必要に応じて調理をするという新しい調理手法。今回受託をした調理補助業務とは、この食材の下処理から真空パックにするまでの仕事になる。

静岡出張所では給食業務の実績が全くないにもかかわらず、新しい調理法による業務を委託するという事は、病院の組合員への大きな信頼の表れでもある。「厨房の清掃はセンターさんにまかせているから、いつ監査が入っても安心と言われてるよ」と杉本操（63歳）さんは誇らしげに語る。

働く意味 相通じるものが

取材の日、仕事が終わって午後8時半頃、事務所に集ってくれたのは杉本さん、近藤米子

さん(64歳) 和田まさ子さん(67歳) 芹沢君子(63歳)さん、大畑百代(66歳)さんの5人の組合員。その5人に「なぜそれほど『和』がつくられているのか」聞いてみた。

「2時間でワッと集中的に終らせないといけないから、人の欠点を観てるひまがないんだ。仕事が終わると、すぐ帰りたいし。」「女の特権をやってる時間がないんだよ。」と組合員たちは笑う。「栄養課長さんは『和』をとても大事にする人。仕事に入る時はみんな同等だと言って、課長が掃除もすればお茶もいれるんだよ。これをはじめて見た時はびっくりしたけど、課長は私たちの雰囲気似たところがあると思ったんじゃないかな。『センターと聖隷は、働く意味とか気持ちとかいうところに相通じるものがあるような気がする』と課長さんが言われていたことがあったよ。そういうことが、今度の仕事につながったんじゃないかな」と杉本さん。「新年会とか忘年会にも参加させてもらって、親近感が沸いたよね」「それから職員さんと親しく話すようになったよね」と和田さん。

これだからね、団会議が楽しいさ

こんな話をしていると、テーブルの上に杉本さん手作りのごちそうが次々並びはじめた。炊き込み御飯のお握り、しめさば、お新香、そして缶ビール...。「これだからね、団会議が楽しいさー」と誰かが言うと、「そうそう」とわっと笑いがおこった。

毎月1回の団会議の後は、いつもみんなで食事と少しのアルコールをとりながらおしゃべりをするのだと言う。

この日もおしゃべりに花が咲いた。

「このお新香おいしいね」「うちのおばあちゃんが漬けたさ」「元気だね。91歳には見えないねー」「私も90まで生きたいね」「人

の世話にならないで長生きしたいよ」「おばあちゃんはよろよろしてこわいから、ほんとは私、家事させたくないの。でも、これをやらせないと寝たきりになるから」「元気でいたいねー」。出されたお新香の話から、家族の話、病気の話、前職の話へと話題が広がっていく。

「もうほとんどの人が親を見るのは卒業したから、怖いものなしなんだよ」と一人が言うと「私も3年見たよ」「私のところは、小姑さん14年寝たんだよっていう話したよね」「大変だったねー」「うちは3年間3人見たよ」とみんながこたえる。

「私は、3家族のお嫁さんだったからねー。多い時は16人家族だよ」「へー。もう団体だね」「私も17、8のころ奉公先で20人、30人のご飯のしたくしたよ。よく芯米(芯のあるご飯)こしらえて笑われたり、叱られたりしたね」。

気持ちによりそうように

ご主人が腎臓を悪くして聖隷病院に入院されているという大畑さんに、他の組合員が心配して声をかけた。

「トイレも自分でいけないんだよ」と大畑さん。「お手洗いぐらいは自分で行きたいね」(芹沢さん)「あれだけの人が下を看てもらおうということは、相当こたえてるとおもうさ」「うちは下の世話だけはさせなかったね」(和田さん)「それはお互いにとって幸せだったね」(芹沢さん)「でもね、聖隷に入院してる時にね、トイレからなかなか戻ってこないから、見に行ったださ。そしたら自分で掃除してたんだよ。自分が汚しちゃって、後に入る人に気の毒だからって。私、『なんで私に言ってくれないの』って怒鳴ってやったよ。うちは飲んだくれだったからね、肝臓からあちこちに転移してね。近藤さんとこもそう?」(和

でも、僕が赴任した当初は、必ずしもそういう雰囲気ではありませんでした。意見を言う人が決まっていたのです。他の人は「言われた通りにやります」と言っていました。本音のところは「一生懸命やってるのに...」という気持ちもあるんじゃないかと思っていました。それで、団会議のときに「〇〇さんはどう思いますか」と全員にふるようにしたのです。一人の発言は必ずしも全員の意見ではありません。それをちゃんと出してもらいたかったのです。それは、前任地の西淀病院現場にいた時の経験があるからです。西淀病院の契約解除の話が出ていた時、事業本部から現場に来て方針を決めていくけれど、現場で組合員と一緒に働いていた僕には、組合員には別の考え方や思いがあるように見えました。そこを出し合っていく必要があったのに、それを僕も言いきれなかったのです。人それぞれ考え方が違うのは当然のこと。その

違いを認め合い、その上でどうしていこうかと考える。それができるのが、『労協』なんじゃないかと思っています。」

「これじゃあ美談になってしまう。中野武の『お笑い』のイメージが『まじめ』なイメージに変わってしまうから載せないでほしい」と笑いながら、こう答えてくれた。

人は違って当たり前、だからぶつかり合うのも当たり前なのだ。だが、お互いに「自分という人間」を出しあい、理解しようとする関係・場があるからこそ、その違いを認め合える。「労協だからこうあるべきだ」と押さえこまれずに、その違いを、「良い仕事」を基準にどうしていこうかと考え合い、話し合うことができること。これが、聖隷病院現場の組合員の『和』をつくりあげた秘密なのではないだろうか。

